

Title	自己開示の内面性が対人魅力に及ぼす影響 : 被開示者における対人的志向性の効果に関する縦断的研究
Author(s)	出口, 拓彦; 吉田, 俊和
Citation	対人社会心理学研究. 4 P.51-P.56
Issue Date	2004
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/3717
DOI	10.18910/3717
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

自己開示の内面性が対人魅力に及ぼす影響¹⁾

—被開示者における対人的志向性の効果に関する縦断的研究—

出口 拓彦(日本学術振興会特別研究員、名古屋大学)

吉田 俊和(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

本研究は、長期間にわたる自己開示が対人魅力の変容に及ぼす影響について、開示内容の内面性や被開示者の対人的志向性の影響に着目して検討することを目的とした。国立大学の大学生 74 名を対象に、4 月と 7 月の計 2 回質問紙による測定を行った。4 月の調査では、自己開示、対人的志向性、対人魅力について測定を行った。一方、7 月の調査では、自己開示、対人魅力についてのみ測定を行った。調査対象者のうち、知り合って間もない友人が多いと思われる大学 1 年生(男子 20 名、女子 45 名、計 65 名)を分析の対象とした。各水準における自己開示(内面性:低・中・高)の変化量と、対人魅力に関する下位尺度との間の積率相関係数を算出した。さらに、回答者を対人的志向性高群・低群に 2 分し、群ごとの分析も行った。その結果、長期的な自己開示においても、対人魅力に対する肯定的な影響が示された。また、対人魅力における「交流」の因子については、自己開示との間に曲線的な関係を持つことが示唆された。さらに、対人的志向性が高い者は、低い者に比べて、自己開示の影響を受けやすい傾向も示された。

キーワード: 自己開示、内面性、対人的志向性、対人魅力、縦断的研究

問題

自己開示が対人魅力に及ぼす影響については、これまでに様々な研究がなされている(e.g. Cozby, 1972; 中村, 1985b, 1986b; Swap & Rubin, 1983; 高木, 1992)。Cozby(1972)は、自己開示の内面性と対人魅力の間には、曲線的な関係があることを示唆している。しかし、その一方で、Rubin(1975)は内面性が低位の自己開示を行った者は、中位・高位の自己開示を行った者よりも、好意的に評価されたことを報告している。また、Ehrlich & Graeven(1971)は、自己開示の内面性と対人魅力の間には、特に関連は見いだされなかったと述べている。

榎本(1983, 1997)は、開示者に対する好意性の認知に関する研究を概観し、その結果が必ずしも一致していないことを報告している。また、中村(1984)も、「他者の行う自己開示が、その他者に対する魅力にどのような影響を及ぼすのか」という問題に関連した従来の研究は、これまで一貫した結果を見出していない」(p.131)と述べている。中村(1984)は、過去の研究結果から、「対人魅力に対して、自己開示の内容と交互作用効果をもつような要因」(p.131)があると考え、自己開示が対人魅力に及ぼす影響について、開示の個人志向性(personalism)に着目して検討している。その結果、開示が個人志向的であるときに、開示内容の内面性が対人魅力に対して肯定的な影響を及ぼす傾向を見いだしている。

このような、自己開示と対人魅力との関連に影響を及ぼす要因に関して、Swap & Rubin(1983)は、被開示者の対人的志向性に注目している(対人的志向性とは、「相互依存関係の対人的側面に対して敏感であるかどうか」という連続変数(斎藤・中村, 1987, p.97)である)。そして、

対人的志向性が高い者は、低い者に比べて、開示者に対してより強い対人魅力を示すことを報告している。さらに、中村(1985a)も、対人的志向性の効果に注目して、自己開示が対人魅力に及ぼす影響について検討している。その結果、表面的開示条件・内面的開示条件のいずれにおいても対人的志向性が高い者の方が、低い者よりも、開示者を好意的に評価する傾向を報告している。しかし、開示隠蔽条件(一部の話題についての開示を拒否する条件)においては、対人的志向性が高い者は、開示者を逆に非好意的に評価する傾向も見いだしている。このように、自己開示が対人魅力に影響を及ぼす過程においては、被開示者の対人的志向性が重要な役割を担っていると考えられる。

しかし、従来の研究では、実験的な手法によって、操作的になされた自己開示の影響について検討されたものが多く、また、比較的短期間における自己開示に焦点が当たったものが少なくない。長期的な自己開示について検討したものとしては、Taylor(1968)の研究が挙げられる。Taylor(1968)は、大学新入生のルームメイトを対象に自己開示や対人関係の変化について、質問紙を用いて 13 週間にわたって検討を行っている。その結果、関係性の初期において互いに高開示のペアの方が、低開示のペアよりも、その後の全時点(1, 3, 6, 9, 13 週間後)において、相互的な活動(金銭の貸し借りや家への招待など)の回数が高いことを示唆している。また、非内面的な自己開示は急速に増加する一方で、内面的な自己開示は緩やかに増加することも報告している。しかし、この研究では、被開示者の対人的志向性という、自己開示と対人魅力との関連に影響を及ぼす要因の効果につ

いては着目されていない。

したがって、本研究においては、長期間にわたる自己開示が対人魅力の変容に及ぼす影響について、開示内容の内面性や被開示者の対人的志向性に注目して、縦断的に検討することを目的とした。また、実験室場面における対人魅力の形成ではなく、大学新入生の実際の対人関係を研究対象とし、現実場面における自己開示の対人魅力に対する影響について検討することとした。

方法

調査対象者および調査時期

東海地方における国立大学の大学生 74 名(男子 25 名、女子 49 名)。調査時期は 2001 年で、年度初めの 4 月と、3 ヶ月後の 7 月の計 2 回行った。

測定された変数

自己開示の内面性(独立変数) 飯長(1977)の自己開示尺度(ISDQ)を、大学生の友人からなされた自己開示について質問するように変更した(Table 1)。

ISDQ の各項目には、開示する内容の「話しにくさ」に応じて、「低—中—高」の 3 つの段階が設定されている。各段階の例としては、「好きな音楽、嫌いな音楽(低)」「自分の父親の職場名、地位は何か(中)」「現在自分は何れくらいの収入を得ているか(高)」などが挙げられる(括弧内は内面性の程度を示す)。このうち、話しにくさ「高」の例のように、大学生にとっては比較的抵抗を感じない内容と思われた項目については、「両親の収入について」などと変更した。また、「どんな酒が好きか(中)」など、大学の新生(未成年である可能性が考えられる)に質問することが不適当と思われた項目については削除した。さらに、「○○さんの性格の短所(高)」などの新たな項目を追加して、「低」項目 9 つ、「中」項目 8 つ、「高」項目 5 つの、計 22 項目を作成した。これらの項目について、「よく話す」「話す」「少し話す」「どちらともいえない」「あまり話さない」「話さない」「全く話さない」の 7 段階評定で回答を求めた。

対人的志向性(独立変数) 中村・斎藤(1985)、斎藤・中村(1987)の対人的志向性尺度(IOS-V)を、一部修正した尺度を使用した。この尺度は、①人間関係志向性(例:「日頃から人間関係を大事にしている」「人付き合いがよい方だと思う」)、②対人的関心・反応性(例:「人からの批判が気になる」「他人の行動の動機を知ることに関心がある」)、③個人主義傾向(「自分は自分、他人は他人と割り切って物事を考える方である(逆転項目)」「あまり人のことには立ち入らない方である(逆転項目)」)という 3 つの観点からなる計 18 項目で構成されている。これらの項目について、「非常にそう思う」「少しそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の 5 段階評定で回答を求めた。

対人魅力(従属変数) 藤森(1980)の対人魅力尺度を一部変更した 19 項目を使用した(Table 2 参照)。変更の際には、「○○さんと一緒に授業を受けたい」などの項目を新たに追加し、さらに、「○○さんと個人的なことでも話したい」といった自己開示に近い内容が触れられている項目等を削除した。これらの項目について、「非常にそう思う」「そう思う」「少しそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」「全くそう思わない」の 7 段階評定で回答を求めた。

Table 1 本研究において使用された自己開示の質問項目

1. ○○さんの好きな音楽、嫌いな音楽について (L)
2. ○○さんが最近の性風俗をそのように思っているかについて (M)
3. ○○さんが大学の先生をどう思っているかについて (L)
4. ○○さんが自分の学歴をどう思っているかについて (M)
5. ○○さんの性格の短所について (H)
6. ○○さんがやっている又はやっていたスポーツについて (L)
7. ○○さんの父親の職場名、地位について (M)
8. ○○さんの一番好きな娯楽について (L)
9. ○○さんの両親の教育に対する不満について (H)
10. ○○さんが今までどんな異性を好きになったことがあるかについて (L)
11. 一人で何かやるのとみんなでやるのと○○さんは主にどちらが好きかということについて (M)
12. ○○さんの属しているクラブ・サークルについて (L)
13. 価値観の違う人と結婚することを○○さんがどう思うのかについて (M)
14. ○○さんの家庭の事情について (H)
15. ○○さんの好きな食べ物、嫌いな食べ物について (L)
16. ○○さんが女性差別をどう思っているかについて (M)
17. ○○さんの両親の収入について (H)
18. ○○さんの好きなテレビ番組について (L)
19. ○○さんが今の自分の勉強からどんな満足を得ているかについて (M)
20. ○○さんが今までで一番恥ずかしいと思った経験について (H)
21. ○○さんの好きな歌手、俳優、スポーツ選手について (L)
22. ○○さんのやらなければいけないのにやりたくない勉強について (M)

数値は項目番号を示す。

項目の後のアルファベットは内面性の水準を示す。

(L: 低位 M: 中位 H: 高位)

手続き

測定は、同一の対象者に対して 4 月と 7 月の 2 回、講義中に行われた。4 月の調査では、自己開示、対人的志向性、対人魅力の 3 つの変数全てについて測定を行った。一方、7 月の調査では、自己開示、対人魅力の 2 つの変数についてのみ測定を行った。これは、対人的志向性は自己開示や対人魅力に比べて特性的な要素が強く、比較的安定していると考えられたためである。

自己開示および対人魅力の測定の際には、4月の測定においては、まず、「大学入学後に知り合った、同じ学部
の同性の友人」を思い浮かべるよう教示し、イニシャルの
記入を求めた。次に、その友人から回答者に対してなされ
た自己開示について回答を求め、さらに、回答者の友人
に対する対人魅力について質問した。自己開示、対人魅
力に関する尺度ともに、各質問項目の中には、必ず「○○
さん」という語句を入れ、同一人物を意識して回答するよ
うに促した。また、1人の回答者につき、2人の友人の自己
開示および対人魅力について回答を求めた。7月の測定
の際には、「前回あなたが記入した友人」を思い浮かべる
よう教示し、以後は4月の測定と同様の方法で、2人の友
人について回答を求めた。

各項目の配置については、4月の測定においては、①
対人的志向性、②自己開示を受けた頻度(1人目)、③開
示者に対する対人魅力(1人目)、④自己開示を受けた頻
度(2人目)、⑤開示者に対する対人魅力(2人目)という順
序であった。7月の測定においては、対人的志向性の測
定を除外した以外は、4月と同様の順序で行った。

なお、回答は匿名で行われた。しかし、本研究は縦断
的研究であるため、4月と7月に実施した質問紙を照合す
る必要性があった。このため、誕生日と学籍番号の下2桁
の記入を求め、これによって照合した。

結果

分析の対象としたデータ

4月と7月の2回の測定に共に回答した者のみを分析
の対象とした。本研究は対人魅力の変容について検討す
ることを目的としている。このため、知り合って間もない友
人が多いと思われる大学1年生(男子20名、女子45名、
計65名、平均年齢18.28歳、標準偏差0.48)のみを分析
の対象とした。また、本研究においては、1人の回答者に
つき2人の友人に対して回答を求めているが、各々独立
した(対応のない)データとして分析を行った。

各変数の指標の算出

自己開示の内面性および頻度 まず、各項目に対して
予め設定された内面性の水準(低・中・高)ごとに、回答を
合計した。さらに、7月の測定値から4月の測定値を引い
た値を求め、これを指標とした。内面性の水準ごとの変化
量の平均値(および標準偏差)については、低位
0.42(0.94)、中位0.48(0.86)、高位0.50(0.92)であり、い
ずれの水準においても正の値が示された(なお、4月の平均
値(標準偏差)は、低位3.91(1.07)、中位2.36(0.93)、高位
2.19(1.00)、7月は、低位4.33(1.12)、中位2.84(1.09)、高
位2.69(1.19)であった)。

対人的志向性 4月に測定された各項目に対する回答
を合計し、これを指標とした。α係数は.75であり、一定の

内的整合性が示された。

対人魅力 まず、項目ごとに4月の測定値と7月の測定
値を加算した。次に、この値を基に因子分析(主成分解・プ
ロマックス回転)を行い、固有値の減衰状況と因子の解釈
可能性から3因子解を採用した(Table 2)。

第1因子は「○○さんと気が合いそうである」「○○さん
に親しみを感じる」などの、相手との情緒的な親しさに関
する項目から構成された。このため、藤森(1980)をもとに
(以下も同様)、「親密」の因子と命名された。第2因子は
「○○さんと一緒に勉強をしたい」「○○さんと一緒にスポ
ーツをしたい」などの、行動を共にすることに関する項目
から構成され、「交流」の因子と命名された。第3因子は
「○○さんは何をすることも手際がよい」「○○さんは他の
人から信頼されている」などの、評価的な側面に関する項
目から構成され、「承認」の因子と命名された。

Table 2 対人魅力に関する尺度の因子パターン
(主成分解・プロマックス回転)

質問項目(一部略記)	F1	F2	F3
1. 気が合いそうである	1.03	-.06	-.20
5. 親しみを感じる	1.02	-.06	-.16
3. 会って話しをしたい	.86	.15	-.09
2. 正直で信頼できる	.86	-.22	.27
9. 一緒にいると楽しい	.83	.10	-.04
12. 安心して頼み事ができる	.69	-.12	.36
4. 一緒に食事に行きたい	.54	.36	.03
14. 一緒に仕事をしたい	-.08	.91	.04
10. 一緒に勉強したい	-.07	.88	.04
19. 一緒に図書館に行きたい	-.05	.85	.05
18. 一緒にコンサートに行きたい	-.10	.78	-.06
16. 一緒にスポーツをしたい	.02	.67	-.07
17. 私にとって理想的な人です	.20	.62	.12
8. 何をすることも手際がよい	-.29	.02	.95
7. 頭がよい	.03	-.03	.85
11. 他の人から信頼されている	.33	-.01	.56
15. 社会的に望ましい人である	.17	.30	.45
6. 一緒に旅行に行きたい	.48	.44	.04
13. 一緒に授業を受けたい	.41	.60	-.10
	F2	.72	
	F3	.60	.57
	α係数	.95	.89
		.80	

※質問項目の前の数値は項目番号を示す。

これらの因子ごとに、7月の測定値から4月の測定値を
引いた値(変化量)を算出し、これを指標とした。なお、全
ての因子におけるパターン係数の絶対値が.40未満の項
目や、複数の項目に.40以上の値を示した項目について
は、以後の分析から除外した(「○○さんと一緒に旅行に

行きたい」、「〇〇さんと一緒に授業を受けたい」の 2 項目)。変化量を基に算出した α 係数は、「親密」の因子は.91、「交流」の因子は.79、「承認」の因子は.71 であり、「承認」の因子の α 係数が多少低いものの、一定の内的整合性が示された。因子ごとの変化量の平均値(標準偏差)については、「親密」 $0.14(1.10)$ 、「交流」 $0.04(0.97)$ 、「承認」 $0.06(0.89)$ と、因子によって正負の符号が異なり、4 月から 7 月の間に、必ずしも対人魅力が向上しているとは限らない可能性が示された。

なお、変化量のみを指標とした場合、4 月 7 月ともに高い対人魅力を示した者(高い対人魅力を維持した者)と、ともに低い対人魅力を示した者(対人魅力が向上しなかった者)が同列に扱われてしまうという問題が生じる。このため、変化量だけではなく、7 月の測定値も指標として以後の分析を行った。7 月の測定値を基に算出した α 係数は、「親密」の因子は.94、「交流」の因子は.89、「承認」の因子は.77 であった。変化量による指標の場合と同様に、「承認」の因子の α 係数が多少低いものの、他の 2 つの因子については、高い内的整合性が示された。因子ごとの平均値(標準偏差)については、「親密」 $5.41(1.16)$ 、「交流」 $4.43(1.16)$ 、「承認」 $4.98(0.94)$ であった。

また、変化量による指標と 7 月の測定値による指標との相関係数は、「親密」が $r = .69$ 、「交流」が $r = .59$ 、「承認」が $r = .51$ であり、いずれの指標間においても中程度の正の相関が示された($ps < .01$)。

自己開示の内面性が対人魅力に及ぼす影響

各水準における自己開示(内面性:低・中・高)の変化量と、対人魅力に関する 3 つの下位尺度(親密・交流・承認)との間の、積率相関係数を算出した(Table 3, Table 4)。また、対人的志向性の影響についても検討するために、対人的志向性の平均値(3.70, $SD = 0.41$)を基準に高群・低群に 2 分し、群別の相関分析も実施した。なお、前述したように、対人魅力については変化量だけではなく、7 月の測定値そのものを指標とした分析も行った。

その結果、対人魅力の変化量を従属変数とした分析については、低・中・高位の自己開示と対人魅力の全ての指標間に有意な正の相関が示された(Table 3)。ただし、「交流」については、高位の自己開示との間には、微弱な相関しか示されなかった。また、「承認」についても、中位・高位の自己開示との間には、微弱な相関しか示されなかった。

対人的志向性高群・低群別の分析では、高群においては、全般的に多くの指標間に相関が示された。一方、低群においては、「親密」についてのみ、全ての水準の自己開示と有意な相関が示された。「交流」や「承認」については、どの水準の自己開示とも有意な相関は示されなかった。

Table 3 各水準における自己開示と対人魅力(変化量)の積率相関係数

対人魅力の因子	自己開示の内面性	対象者全体	対人的志向性別	
			高群	低群
親密	低位	.54**	.65**	.35**
	中位	.33**	.36**	.30*
	高位	.38**	.43**	.32*
交流	低位	.39**	.56**	.21
	中位	.25**	.29*	.24†
	高位	.19*	.24†	.08
承認	低位	.32**	.50**	.01
	中位	.19*	.38**	-.03
	高位	.19*	.35**	-.04

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

次に、7 月の時点での対人魅力を従属変数とした分析については、低・中・高位の自己開示と「親密」「承認」の指標間に有意な正の相関が示された(Table 4)。ただし、「交流」については、高位の自己開示との間には、微弱な相関しか示されなかった。また、「承認」については、中位の自己開示の間のみに微弱な相関が示された以外には、有意な相関は示されなかった。

Table 4 各水準における自己開示と対人魅力(7月の測定値)の積率相関係数

対人魅力の因子	自己開示の内面性	対象者全体	対人的志向性別	
			高群	低群
親密	低位	.38**	.47**	.33*
	中位	.39**	.40**	.35**
	高位	.33**	.39**	.23†
交流	低位	.29**	.38**	.24†
	中位	.29**	.33**	.23†
	高位	.18*	.24†	.10
承認	低位	.10	.10	.15
	中位	.19*	.23†	.13
	高位	.08	.09	.05

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

対人的志向性別の分析では、高群においては、低・中・高位の自己開示と「親密」の指標全般に、有意な相関が示された。また、「交流」については、低位・中位の自己開示との間に有意な相関が示された。「承認」については、いずれの水準の自己開示についても、有意な相関は示されなかった。一方、低群においては、「親密」についてのみ低位・中位の自己開示との有意な相関が示された。「交流」や「承認」については、どの水準の自己開示とも有意な相関は示されなかった。

なお、日常場面における会話において、内面性の高い自己開示を行う際には、より低次の自己開示が伴われることが少なくないと思われる。このため、自己開示の水準間

の相関係数を算出した(Table 5)。その結果、 $r = .46 \sim .62(p < .01)$ の有意な正の相関関係が示された。

Table 5 自己開示の水準間の積率相関係数

	低位	中位
中位	.46**	
高位	.49**	.62**

** $p < .01$

考察

自己開示と対人魅力に関する諸指標の間全般に正の相関が示された。すなわち、3ヶ月という長期的な自己開示においても、対人魅力に対して肯定的な影響を及ぼすことが示唆された。また、対人魅力における「交流」の因子については、内面性が高位の自己開示との間には、微弱な相関しか示されなかった。このことから、「交流」の因子に影響を与えるのは、主として内面性が低位・中位の自己開示であると考えられる。このような自己開示の内面性と対人魅力の間における曲線的な関係は、Cozby(1972)の結果を追認するものとなった。さらに、対人的志向性が高い者は、低い者に比べて、自己開示の影響を受けやすい傾向も示された。このことから、現実の対人関係における長期の自己開示においても、Swap & Rubin(1983)や中村(1985a)の研究結果と同様の傾向が見られることが示された。つまり、自己開示と対人魅力の関連に対して、3ヶ月という長期間であっても対人的志向性が継続的な影響を及ぼしている可能性が示唆された。

また、「承認」の因子については、自己開示の影響が他の因子に比べて少なかった。Taylor(1968)は大学生の自己開示や対人関係の変化について検討を行っている。そして、ルームメイト間の自己開示量は全般的に増加する一方で、ルームメイトに対する尊敬(esteem)の度合いは、次第に低下する傾向を報告している。つまり、自己開示と相手に対する認知との間には、必ずしも正の関連があるとは限らない可能性を示唆している。さらに、中村(1986a)は、開示内容の「望ましさ」が、対人魅力に対して「逆U字型」の効果を持つことを報告している。つまり、開示内容の望ましさによって、対人魅力に与える影響が異なる可能性を示唆している。しかし、本研究においては、開示内容の望ましさの影響については特に考慮されなかった。「承認」の因子は、「何をするにも手際がよい」「頭がよい」「社会的に望ましい人である」といった、評価的な内容の項目から構成されている。このような因子に対して、「〇〇さんの好きな食べ物、嫌いな食べ物について」という評価的に中立的と思われる自己開示や、「〇〇さんの性格の短所」という否定的な自己開示を行っても、必ずしも「承認」されることは限らず、自己開示の影響が顕著に示されなかった可能

性が考えられる。したがって、今後は、このような開示内容の望ましさについても留意する必要性が考えられる。さらに、中村(1986a)が指摘したような曲線的な関係についても考慮して検討することも重要であろう。

なお、本研究は3ヶ月間という比較的長期における自己開示の影響について、相関的に検討したものであった。

このため、被開示者の対人的志向性が、被開示者の開示者に対する行動(自己開示の返報など)に対して、促進的な影響を及ぼした可能性も考えられる。しかし、本研究においては、ペアの一方の自己開示のみが測定され、被開示者の自己開示については検討されなかった。したがって、「開示者—被開示者」というペア双方の自己開示と対人魅力との関連についても分析し、自己開示の返報性などの被開示者の反応についても検討することが重要であると考えられる。

また、自己開示の水準間の相関係数を算出したところ有意な正の相関が示され、日常場面における会話において、内面性の高い自己開示を行う際には、より低次の自己開示が伴われる可能性が示唆された。このことから、日常場面における自己開示の具体的な内容に関して、会話データなどを測定・分析するなどして、内面性の程度がどの程度の水準にある自己開示が、どのようなプロセスにおいて行われるかについて、さらなる検討を行うことが必要であろう。

なお、本研究においては、調査対象者が少なかったため分析されなかったが、今後は、長期的な自己開示の影響における男女差についても検討していく必要がある。また、本研究で使用した自己開示に関する尺度は、飯長(1977)を変更して作成したものであり、尺度が作成された当時と現在とでは、各項目に設定された自己開示の内面性の水準に多少の相違が生じている可能性も推測される。このため、尺度に設定された内面性の水準の妥当性についても、併せて検討していく必要性も考えられる。

引用文献

- Cozby, P.C. 1972 Self-disclosure, reciprocity and liking. *Sociometry*, 35, 151-160.
- Ehrlich, H.J. & Graeven, D.B. 1971 Reciprocal self-disclosure in a dyad. *Journal of Experimental Social Psychology*, 7, 389-400.
- 榎本博明 1983 対人関係を規定する要因としての自己開示研究 心理学評論, 26, 148-164.
- 榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 藤森立男 1980 態度の類似性、話題の重要性が対人魅力に及ぼす効果—魅力次元との関連において— 実験社会心理学研究, 20, 35-43.
- 飯長喜一郎 1977 グループ合宿における自己開放性 東京大学教育学部紀要, 17, 77-84.
- 中村雅彦 1984 自己開示の対人魅力に及ぼす効果 心理

- 学研究, 55, 131-137.
- 中村雅彦 1985a 自己開示の対人魅力に及ぼす効果(4)—
評価者の対人的志向性に関する検討— 対人行動学研究,
4, 12-18.
- 中村雅彦 1985b 対人魅力の規定因としての自己開示 名
古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 32, 201-213.
- 中村雅彦 1986a 自己開示の対人魅力に及ぼす効果(2)—
開示内容の望ましさの要因に関する検討— 実験社会心
理学研究, 25, 107-114.
- 中村雅彦 1986b 自己開示の対人魅力に及ぼす効果(3)—
開示内容次元と魅力判断次元の関連性に関する検討—
心理学研究, 57, 13-19.
- 中村雅彦・斎藤和志 1985 対人志向性尺度に関する研究(2)
日本グループダイナミクス学会第 33 回大会発表論文集,
91-92.
- Rubin, Z. 1975 Disclosing oneself to a stranger:
Reciprocity and its limits. *Journal of Experimental
Social Psychology*, 11, 233-260.
- Swap, W.C. & Rubin, Z. 1983 Measurement of
interpersonal orientation *Journal of Personality and
Social Psychology*, 44, 208-219.
- 斎藤和志・中村雅彦 1987 対人的志向性尺度作成の試み
名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 34, 97-109.
- 高木浩人 1992 自己開示行動に対する認知と対人魅力に
関する研究—親密な関係と親密でない関係の比較— 実
験社会心理学研究, 32, 60-70.
- Taylor, D.A. 1968 The development of interpersonal
relationships: Social penetration processes. *Journal of
Social Psychology*, 75, 79-90.

註

- 1) 本研究は、名古屋大学教育学部の高山丹来氏が、第2
著者の指導を受けて測定した 2001 年度卒業論文のデ
ータを再分析し、まとめなおしたものです。記して感謝
いたします。また、英文アブストラクトの校閲を行って
いただきました名古屋大学大学院教育発達科学研究科の
Tan Eng Hai 氏に心よりお礼申し上げます。

The effect of intimacy of self-disclosure on interpersonal attraction: A longitudinal research focused interpersonal orientation of disclosure-recipient

Takuhiko DEGUCHI (*Research Fellow of the JSPS, Nagoya University*)

Toshikazu YOSHIDA (*Graduate School of Education and Human development, Nagoya University*)

This longitudinal research investigated the effect of intimacy of self disclosure on interpersonal attraction with focus on disclosure-recipient's interpersonal orientation. Seventy-four national university students (male 25, female 49) completed questionnaires in April and July. Self disclosure, interpersonal attraction, and interpersonal orientation were measured in April. In July, self disclosure and interpersonal attraction questionnaire was administered. The targets of analysis were 65 freshmen (male 20, female 45) out of the 74 undergraduates. The Pearson's correlation analyses between self disclosure and interpersonal attraction were conducted. The students were further divided into 2 groups (high and low) based on their interpersonal orientation, and correlation analyses by group were done. The results were as follows. 1) Long-term self disclosure had positive effect on interpersonal attraction. 2) There was a curved relationship between intimacy of self disclosure and "communication" factor of interpersonal attraction. 3) Participants who had high interpersonal orientation were more sensitive to self disclosure than those who had low interpersonal orientation.

Keywords: self disclosure, intimacy, interpersonal orientation, interpersonal attraction, longitudinal research